かぶと虫

新美南吉

一

お花畑から、大きな虫が一ぴき、ぶうんと空にのぼりはじめました。

からだが重いのか、ゆっくりのぼりはじめました。

地面から一メートルぐらいのぼると、横に飛びはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆっくりいきます。うまやの角（かど）の方へ、のろのろといきます。

見ていた小さい太郎は、縁側（えんがわ）からとびおりました。

そして、はだしのまま、ふるいを持って追っかけてい

きました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる草の土手（どて）の上で、虫をふせました。

とってみると、かぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫とった。」

と、小さい太郎はいいました。けれど、だれも、なんともこたえませんでした。小さい太郎は、兄弟（きょうだい）がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということは、こんなとき、たいへんつまらないと思います。

小さい太郎は、縁側にもどってきました。そしてお

ばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫とった。」

と、見せました。

縁側（えんがわ）にすわって、いねむりしていたおばあさんは、目をあいてかぶと虫を見ると、

「なんだ、がにかや。」

といって、また目をとじてしまいました。

「ちがう、かぶと虫だ。」

と、小さい太郎は、口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうががにだろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにゃむにゃといって、

ふたたび目をひらこうとしませんでした。

小さい太郎は、おばあさんのひざから糸切れをとって、かぶと虫のうしろの足をしばりました。そして、縁板（えんいた）の上を歩かせました。

かぶと虫は、牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、前へ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きっと、かぶと虫には、おもしろい遊び方があるのです。だれか、きっとそれを知っているのです。

二

そこで、小さい太郎は、大頭に麦わらぼうしをかむり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、門口（かどぐち）を出ていきました。

昼は、たいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、くわ畑の中の金平（きんぺい）ちゃんの家へいきました。金平ちゃんの家には、しちめんちょうを二わかっていて、どう

かするど、庭に出してあることがありました。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいっていかないで、いけがきのこちらから中をのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん。」

と、小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったからです。しちめんちょうにまで、聞こえなくてもよかったからです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎は、なんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとう、うちの中から、

「金平はのォ。」

と、返事がしてきました。金平ちゃんのおとうさんのねむそうな声でした。

「金平は、よんべから腹（はら）がいとうてのォ、ねておるのだで、きょうはいっしょに遊べんぜェ。」

「ふウん。」

と、聞こえないくらいかすかに鼻の中でいって、小さい太郎はいけがきをはなれました。

ちょっとがっかりしました。

でも、またあしたになって、金平ちゃんのおなかがなおれば、いっしょに遊べるからいいと思いました。

三

こんどは、小さい太郎は、ひとつ年上の恭一(きょういち)君の家にいくことにしました。

恭一君の家は、小さい百姓家(ひゃくしょうや)でしたが、まわりに、松や、つばきや、かきや、とちなど、いろんな木がいっぱいありました。恭一君は木のぼりがじょうずで、よくその木にのぼっていて、うかうかと、知らずに下を通ったりすると、つばきの実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことがありました。

また、木にのぼっていないときでも、恭一君はよく、

もののかげや、うしろから、わっといってびっくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくると、もうゆだんができないのです。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろりと進んでいきます。

ところがきょうは、どの木にも恭一君はのぼっていませんし。どこからも、わっといってあらわれてきません。

「恭一はな。」

と、にわとりに餌（えさ）をやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。

「ちょっとわけがあってな、三河（みかわ）の親類へきのう、あずけただがな。」

「ふゥん。」

と、小さい太郎は、聞こえるか聞こえないくらいに、鼻の中でいいました。なんということでしょう。なかのよかった恭一君が、海のむこうの三河（みかわ）のある村に、もらわれてしまったというのです。

「そいで、もう、もどってきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに。」

「いつ？」

「ぼんや正月にゃ、くるだらあずにな。」
「ほんとだねおばさん、ぼんと正月にゃもどってくるね。」
小さい太郎は、望みをうしないませんでした。ぼんにはまた、恭一君と遊べるのです。正月にも。

四

かぶと虫を持った小さい太郎は、こんどは細い坂道をのぼって、大きい通りの方へ出ていきました。
車大工さんの家は、大きい通りにそってありました。

そこの家の安雄（やすお）さんは、もう青年学校にいっているような大きい人です。けれど、いつも、小さい太郎たちのよい友だちでした。じんとりをするときでも、かくれんぼをするときでも、いっしょに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちから、とくべつに尊敬（そんけい）されていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくるとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、ピイと鳴ることができたからです。また安雄さんは、どんなつまらないものでも、ちょっと細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくにつれて、小さい太郎の胸（むね）

は、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫でどんなおもしろいことを考え出してくれるかと、思ったからです。

　ちょうど、小さい太郎のあごのところまであるこうしに、首だけのせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみのといしで、かんなの刃(は)をといでいました。よく見るときょうは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに力を入れるんじゃねえといったら、わからんやつだな。」

と、おじさんがぶつくさいいました。安雄さんは、刃のとぎ方をおじさんにおそわっているらしいのです。顔をまっかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎の方を、いつまで待っても見てくれません。

とうとう、小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん。」

と、小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかったのです。

しかし、こんなせまいところでは、そういうわけにはいきません。おじさんが聞きとがめました。おじさ

んは、いつもは子どもにむだぐちなんかきいてくれるいい人ですが、きょうは、なにかほかのことではらをたてていたとみえて、太いまゆねをぴくぴくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう、きょうから、一人まえのおとなになったでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや。」

と、つっぱなすようにいいました。

すると安雄さんが、小さい太郎の方を見て、しかたがないように、かすかにわらいました。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な目をむけました。

虫がえだから落ちるように、力なく、小さい太郎は
こうしからはなれました。
そして、ぶらぶらと歩いていきました。

五

小さい太郎の胸（むね）に、深い悲しみがわきあがりました。
安雄さんはもう、小さい太郎のそばに帰ってはこないのです。もういっしょに遊ぶことはないのです。おなかがいたいなら、あしたになればなおるでしょう。三河（みかわ）にもらわれていったって、いつかまた帰ってくる

ことあるでしょう。しかし、おとなの世界にはいった人が、もう子どもの世界に帰ってくることはないのです。

安雄さんは、遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎は、べつの世界にいるのです。いっしょに遊ぶことはないのです。

小さい太郎の胸には、悲しみが空のようにひろく、深く、うつろにひろがりました。

ある悲しみは、なくことができます。ないて消すことができます。

しかし、ある悲しみはなくことができません。ないたって、どうしたたって、消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しみは、なくことのできない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上にひとつきり、ぽかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものを見るように、まゆをすこししかめながら、長いあいだ見ているだけでした。かぶと虫がいつか指からすりぬけて、にげてしまったのにも気づかないで——。

底本：「童話集　ごんぎつね―最後の胡弓ひき　ほか十四編」講談社文庫、講談社
　　１９７２（昭和47）年２月15日第１刷発行
　　１９８８（昭和63）年１月30日第30刷発行
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年６月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。